

薬用樹木「カギカズラ」の栽培・収穫技術体系の確立と未利用部位の活用に関するプロジェクトが始動

1. カギカズラについて

カギカズラはアカネ科のつる性木本植物で、房総半島から九州にかけて、また中国南部に自生しています。名前に「カギ」がある通り、葉の付け根にカギ爪状の構造があり(写真1左上)、これを他の植物に引っ掛けて上へと成長する珍しい特徴を持っています。カギ付きの枝は釣藤鈎(チョウトウコウ、写真1右上)と呼ばれる生薬として利用され、ストレス、不眠症、高血圧症、認知症周辺症状等に緩和効果のある漢方薬の原料となっています。しかしながら、カギカズラは我が国に自生する有用な森林資源であるにも関わらず、国産カギカズラは全く利用されておらず、中国からの輸入に100%依存しているのが現状です。このような状況を打開するためには、国内に自生するカギカズラの栽培・収穫技術体系を確立し、自給率を高める必要があると考え、研究を進めています。

2. 国内栽培化に向けたこれまでの成果と課題

各地の自生地から72系統を収集・保存し、有効成分であるアルカロイド含有率を測定したところ、ほとんどが日本薬局方基準を満たしていたことから、国産品が生薬として使用可能であることが明らかとなりました。また、さし木や組織培養(写真1左下)によるクローン苗の作製技術を開発し、耕作放棄地でも栽培可能であることを明らかにしました。さらに、25系統を用いた栽培試験地(写真1右下)を設定し、系統別に成長量や収穫量の調査を進めています。

これまでの試験栽培を進める中で、つるの絡みつきにより栽培・収穫が容易ではないこと、葉を手作業で除去する必要がある、加工調製に大変な手間がかかることなど、解決すべき課題が見えてきました。また、日本薬局方で定められている薬用部位がカギ付き枝のみであるため、手間をかけて除去した葉の利用法が無く、大量の残渣として

廃棄せざるを得ないことから、何らかの活用法を模索する必要がありました。

3. 栽培から利用までを見据えたプロジェクトを開始

そこで、我々森林研究・整備機構の他、国立研究機関、県、大学、医薬品製造販売業者、苗木生産業者が参画して「国産のつる性薬用樹木カギカズラの生産技術の開発と機能性解明に基づく未利用資源の活用」プロジェクトを立ち上げ、農林水産省の令和2年度「イノベーション創出強化研究推進事業」として採択されました。本プロジェクトでは①苗木生産から栽培・収穫・加工調整までの効率化と、国産カギカズラを配合した漢方薬の開発、葉をお茶として新規利用する方法を確立するための課題、②機能性成分評価と、お茶として利用した際の新規機能性の解明および安全性を評価することで利用促進を目指す課題、③品種開発と系統管理、保存、栽培技術のマニュアル化等による技術普及を目指す課題の全3課題について実施を計画しています。本プロジェクトにより安全・安心な国産生薬の供給安定化と、中山間地域の活性化、国民の健康長寿に貢献できることを期待しています。



写真1 カギカズラ

左上:カギカズラの枝(葉の付け根にカギをもつ)、
 右上:生薬「釣藤鈎」(乾燥させたカギを含む枝)、
 左下:組織培養による増殖、右下:圃場における栽培の様子
 (森林バイオ研究センター 小長谷 賢一)